100　誌上発表

医史学教育の可能性：文系学部での実践を例に

勝井　恵子

東京大学 大学院医学系研究科 医療倫理学分野／順天堂大学 大学院医学研究科 解剖学・生体構造科学講座

はじめに

本発表では，文系学部における医史学教育の可能性について模索すべく，実際に行われた演習と講義それぞれひとつずつを取り上げ，学生側の具体的な学習動機やゼミを通じての学びに重きをおいた分析を試みたい．このことは，医史学教育における授業づくりを試みる際の布石となるだろう．

方法

事例とするのは，東京大学文学部・大学院人文社会系研究科にて2009年度夏学期に開講された「中国医学の歴史と思想」という演習と，大正大学にて2015年度春・秋学期に開講された「生物学史」という一般教養科目の講義である．それぞれの授業後に，演習・講義全体にたいする感想を，「なぜ学ぼうとしたのか」「何を具体的に学んだのか」という点をふまえながら自由記述させるレポートを課した．本発表では，それらのレポートをもとに，上述の「学生側の具体的な学習動機やゼミを通じての学びに重きを置いた分析」を報告したい．

結果・考察

①ゼミ受講者の構成

〈東京大学・「漢方の歴史」〉

毎回100分・全15回の本演習は，特定の講座や専攻の必修科目ではない自由選択科目であったのにもかかわらず，多種多様な所属や専門分野の学生が集った．理系の学生がみられなかったのは，必修科目や実験科目，あるいは卒業要件に必要な単位区分の存在によって，文系学生ほどに履修科目を自由に選択する余地がないためであると推察される．

〈大正大学・「生物学史」〉

毎回90分・全15回の本講義は，「自然科学の探究」という枠組みのなかの選択必修科目であった．本講義全体に出来る限りの医史学関連の内容を盛り込み，全15回中2回は医史学のみの講義となるようにシラバスを設定した．受講希望者が殺到し，高倍率の抽選となったため，その結果，全学部全学科から均等に受講者が選出され，1～4年生の約80名が集まった．

②受講動機：なぜ「医学の歴史」を学ぼうとしたのか

〈東京大学・「漢方の歴史」〉

学生たちの学習動機については，主に2点にまとめることができよう．1点目は，ゼミを受講する前の時点ですでに「漢方医学／東洋医学／中国医学」といったものについて各自の理解や関心が土台としてあり，それらについてより深く学んでみたいという向学心である．そしてもう1点は，すでに自分の専門分野があって，それらの議論をより深化させ，発展させたいという各自の研究上のニーズである．

このことは，演習の専門性についての議論へとつながるだろう．「漢方医学の歴史」についての初学者ともいうべき学生たちは，通史的な概説を演習に期待していたといってよいだろう．医学・薬学教育の現場にて医学史教育が課題となった際，内容の専門性を追求するよりも，医学史というものを，通史的に，平易なことばを用いて概説するという点が要求されることが推察される．

〈大正大学・「生物学史」〉

受講生が高倍率の抽選によって選出されたと前述したが，大正大学は文系学部のみで構成される大学であり，「自然科学の探究」という選択必修の講義群は，学生に比較的敬遠される自然科学分野の講義のみで構成されている．そのため，学生たちは自身の文系的知識（今回であれば歴史学）を活かすことができる科目を選ぶ傾向にあり，高倍率となったと考えられる．

また，「生物学史」よりも「医学史」に興味を持って受講したという学生が多かったことが特色として挙げられる．学生のレポートによると，医療系ドラマや戦国武将を題材としたゲームの影響があることがわかった．

結論

無論，医学・薬学教育の現場と，人文科学分野で行われた本演習・本講義とは，学習者の学習歴や知的背景，学習ニーズなどが異なるという点は否めない．だが，本分析は，今後の医史学教育の教育内容や方法論，さらには医史学および医学教育そのものの研究の発展や可能性を示唆するものとして位置づけることができよう．